

平成24年度第1回奈良市子ども発達センター推進会議の概要

開催日時	平成25年2月14日(木) 午前10時から正午まで
開催場所	奈良市役所 北棟6階 第22会議室
議 題	<ol style="list-style-type: none"> 1 委嘱状の交付 2 部長挨拶 3 委員会及び事務局の紹介 4 議事 <ol style="list-style-type: none"> (1) 議長・副議長選任 (2) 推進会議の公開について (3) 実績報告 <ol style="list-style-type: none"> 1) 子ども発達センター療育相談室の事業報告 2) アンケート結果報告 3) 児童発達支援「いっぼ」報告 (4) 療育相談室及び「いっぼ」の評価及び今後の課題について
出席者	出席委員7人(欠席委員なし)・事務局15人
開催形態	公開(傍聴人なし)
決定事項	議長に岩坂委員を選任し、副議長を森山委員とした。
担当課	子ども未来部 子育て相談課
議事の内容	
<ol style="list-style-type: none"> 1 議長及び副議長の選任について 委員の互選により、議長を選任し、副議長が指名された。 2 推進会議の公開について 事務局より、会議が公開であること、会議開催と傍聴について告知し、本日は傍聴人なしであることを説明した。 3 実績報告 <ol style="list-style-type: none"> 1) 「奈良市子ども発達センター 療育相談室」実績報告について ・「奈良市子ども発達センター療育相談室」の実績報告を行った。取り組みとして①個別支援②保護者支援③支援者支援④啓発⑤連携を行なったが、おもに①個別支援③支援者支援について報告を行なった。これからの発達センターの課題としては①保護者の不安な気持ちを受け止め、寄り添いながら、子どもの特徴をしっかりと把握するために職員の支援技術を高めることや業務の仕組みづくりが必要である。②保護者が子どもの一番の理解者になれるよう、相談のプロセスや結果を保護者が手元に残し、保護者や園の先生方と相談内容の共有を目的に作成する『個別相談ノート』や『園巡回療育相談ノート』の活用を進める。将来的には個別の教育支援計画につながるものと考えている。 2) アンケート結果報告 ・幼稚園・保育園に対して実施した「発達に関するアンケート調査」について報告を行った。アンケートの結果より支援の必要な子どもは、幼稚園・保育園に在籍する子どもの 	

中に 10%程度いると見込まれる。このような支援の必要な子どもに対しての個別支援と幼稚園、保育園への園巡回相談業務については市役所庁内の関係課によっておこなわれているが、各機関の機能や役割の整理などを行い活用しやすいようにしていくことが必要である。

3) 児童発達支援「いっぽ」の実績報告

- ・「いっぽ」が周知され稼働率が高まった。
- ・来年度は、保護者からの要望もあり食事指導をとりいれるなど保護者のニーズに合わせた療育内容を検討し充実させていく。職員の増員、指導時間の変更、療育実施日数増加などを行う。
- ・他機関連携を進めていく。
- ・研修などに参加し職員のスキルアップに努める。

実績報告に対する質疑応答

- ・「いっぽ」の保護者との連絡方法について質問があった。日々の送迎時及び電話連絡、行事としての母子通園の機会や保護者勉強会の機会を利用していると回答する。
- ・アンケートの中で相談ができていない人が、発達センターや教育センター以外に市内のどこに相談出来ているのか、園と連携が取れにくい保護者の相談がどうなっていくのかも含め実態把握が必要ではないかと意見あり。
- ・「いっぽ」の利用者の利用頻度、利用期間について質問があった。在宅児については週3日利用から、在園児については週1回もしくは月2回の利用が多いと回答する。

4. 今後の課題について討議

- ・相談しやすいセンターになってほしい。
- ・医療、福祉、教育関係など関係機関がたくさんあるが、どこがどのように相談に応じるか十分意見を出し合ってほしい。また多くの支援の必要な子どもたちをどのようにフォローしていくのか受け皿について行政で検討してもらいたい。
- ・「いっぽ」の来年度計画の食事指導について、療育機関で生活面の指導に終わらず療育機関であることを重視したコミュニケーションを大事にしてほしい。
- ・やりとりができてにくいなど集団生活での心配があるという子どもの相談は、ことばが出ていることから言語聴覚士の指導にはつながっていないケースが多い。集団の中でどのようにフォローするかは園巡回で検討する。
- ・アンケートの結果からみると2歳児の課題が多いが2歳児は発達途上であるのでこの時期をどのように支えるか大切。3歳まで体作りや言語コミュニケーションも育てておくことが大切。3歳までの遊びを育てる中で「言語指導」とか「運動指導」と言わなくてもいいが何を育てているのか職員がねらいを持つようにすることが必要になる。

- 客観的なデータとしての発達検査の利用について、継次処理が得意か同時処理が得意かで集団の中で活かしていく力が変わってくるので見分けることが大切。園としては集団の中で個に応じたかかわりを考えることが必要。
- 訓練や療育はどの子にとってもプラスになる。苦手さは誰にでもあることなので、保護者が拒否感を持たないように本人の特徴を伝える工夫がいる。
- 奈良市は他市に比べると社会資源が豊富だ。各機関が連携してそれぞれの機関の特色や役割を共有する場があるとよい。
- 児童発達支援事業は制度が始まったばかりだが、他の事業所も力をつけていくような工夫もしてほしい。
- 「いっぼ」のプログラムを3か月ごとに見直しされている。マンネリ化しないことも大事だが、繰り返しも大切だと考える。
- 社会資源が多い中で、1人の人が様々な機関を利用している場合、ケース会議などを通じて支援の方向性を一致させておくことが大切である。
- 平成26年度末までに障害児通所支援等を利用する子どものすべてに、障害児相談支援を行う予定である。今後は相談支援専門員がキーパーソンとなり、行政機関もたくさんある中で、発達センターが調整役になることが理想的だ。
- 保護者が子どもの発達のしんどい部分を正しく理解することが一番大事だと思う。親としては子どものしんどい部分を乳幼児期に直視して深く理解をすることでどんな支援をしていくか考えることができる。発達センターには主に乳幼児期の子どもの発達を理解するためにがんばってほしい。